

メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈

—— その流れの行方 ——

平 尾 昌 宏

Spinoza-reception in Germany after Mendelssohn

HIRAO Masahiro

Abstract

This article is a part of a series of the researches that chase the history of reception of Spinozism in Germany, and is the second half of an oral report at the congress of the Spinoza Society of Japan (at Osaka University, on Feb. 27, 2010) which took up Moses Mendelssohn's debut work "Philosophical conversations". In that report, his understanding of Spinozism which appeared in the book was surveyed, and its historical contexts were confirmed. In the first half, the context from Wolf to Mendelssohn, and in the second half, the context from Mendelssohn to his successors was treated respectively. This paper presents the latter.

We have pointed out Mendelssohn's understanding of the similarity and difference between Spinoza and Leibniz. In this paper we trace the reception of the two points after Mendelssohn.

On the similarity of Spinoza and Leibniz: Mendelssohn saw the similarity of both between Spinoza's parallelism and Leibniz's preestablished harmony theory, and this understanding was criticized by Lessing, was quoted affirmatively by E. Platner, and was criticized again by Heydenreich.

On the difference of Spinoza and Leibniz: Mendelssohn considered that Spinoza had

平成23年 6 月30日 原稿受理
大阪産業大学 教養部 非常勤講師

subsumed all things in the god and Leibniz had recognized the outside of God. This consideration was accepted by Platner and Maimon and through these two philosophers, Spinozism was formulated as “Acosmism”. The famous formulation of Hegel that Spinozism is Acosmism is not Hegel’s original one, but the conclusion based on these contexts.

まえおき

本稿はドイツにおけるスピノザ主義の受容史を追った一連の研究の一環である¹⁾。

また、本稿は、2010年2月27日、スピノザ研究会（於大阪大学）での口頭報告の内容に基づくものである。

当該の報告では、モーゼス・メンデルスゾーンのデビュー作『哲学的対話』を取り上げて、そこに現れたスピノザ観を概観し、それを成り立たせている思想史的な文脈を確認した。すなわち、前半部では『対話』に至るまでの文脈を、後半部では『対話』から発する文脈を取り扱った。

報告は原稿に依らずに口頭で行ったが、その内容を論文として提出するようにとのスピノザ協会からの求めに応じて、改めて書き下ろした原稿を『スピノザーナ』に寄稿した²⁾。その際に分量の都合で割愛せざるを得なかった後半部分が本稿である。そのため本稿は、別に公表される前半部分を前提としている。詳細はそれに当たって頂きたいが、本稿本論に入る前に、前半部分で示された基本的な論点を簡単に確認しておく。

前稿の概要

『哲学的対話』におけるメンデルスゾーンにとって、真の哲学はライプニッツ哲学であり、スピノザ哲学は真理の半面を捉えているにすぎない。しかしメンデルスゾーンはスピノザを、デカルトからライプニッツへと至る哲学史の展開の不可欠な一段階として評価するば

1) 既刊分としては以下の通り。平尾[2004a], [2004b], [2007a], [2007b], [2009], [2010a], [2011a], [2011b]。

2) 平尾[2011a]を参照。なお、平尾[2011a]では報告の再現のために敬体を用いたが、本稿は査読の結果、掲載条件として文体の変更を求められたため、常体を用いている。結果、両稿の文体上の連続性は失われてしまうことになるが、内容的には連続している。

かりか、宗教と両立可能であるとさえ主張する。これは、それまで無神論と見られてきたスピノザ主義を、限定的ながら高く評価している点で、時代に先駆けたものと言える。

しかし、メンデルスゾーンがこうした思い切った評価をすることができたのは、ヴォルフによるスピノザ批判があったからこそではないかというのがわれわれの論点であった。すなわちメンデルスゾーンは、後の「スピノザ主義者」たち——ゲーテやドイツ観念論者たち——とは違って、スピノザを独自の観点から積極的に評価しているというよりも、ヴォルフによって批判され、既に超克されたものとしてのスピノザ主義を歴史的に位置づけているというに留まるのである。ただ、メンデルスゾーンはヴォルフのスピノザ批判をそのままに反復しているわけではなく、独自の論点を加えていることは見逃せない。

主な論点は二つある。それぞれ、スピノザとライプニッツを接近させるもの、そして、両者を切り離すものである。スピノザとライプニッツを接近させる文脈では平行論と予定調和の関係が取り上げられている。スピノザもライプニッツも、精神と身体の両方に法則を見出しており、しかもその両者が対応関係を持つとされており、その点でスピノザはライプニッツ予定調和説を既に提示していた、とメンデルスゾーンは言う。一方、両者の違いを指摘する段になると、神と世界との関係が取り上げられる。スピノザはライプニッツとは違って神の外にではなく神の内に世界を置いている、というのである。

本稿では、以上を前提として、メンデルスゾーンにおけるこうした議論が、後の世代にどのように受け取られたかを見てゆくことにする。

心－身関係——メンデルスゾーンからの流れ 1

1 レッシング

まずは心身関係を巡っての予定調和説とスピノザ説との関係を見よう。メンデルスゾーンが取り上げたこの論点が、その後どのように受け取られたか。ここで第一に取り上げるべきはレッシングである。

「スピノザを通してライプニッツはただ予定調和の手掛かりに至った (Durch Spinoza ist Leibniz nur auf die Spur der vorherbestimmten Harmonie gekommen)」は小さいながら、比較的よく知られている。この小論は、1763年4月17日のメンデルスゾーン宛の書簡から推して、その直前に書かれたことが分かる。汎神論論争のおよそ20年前である。そしてこれが発表されたのはレッシングの死後、汎神論論争からもおよそ10年を経た1795年である。つまり、この小論は汎神論論争という雑音が全く入っていないものなのである。

われわれにとって特に興味深いのは、これが明確にメンデルスゾーンの『対話』への応

答だからである。書簡の中でレッシングは、メンデルスゾーンにこう書いている。

「私はしばらく以前からもうあなたの第一対話に本当に満足していないことを告白しなければなりません。あなたがあれを書いた当時、あなたは少々ソフィストであったのではないかと思います。そしてあなたに対してライプニッツの側に立つ人が誰も意義をとえなかったことに驚いています。」(Lessing-W, Bd. IX, S. 221)

つまりレッシングはメンデルスゾーンに反対して、スピノザとライプニッツを近づけることには賛成していない。この小論のタイトルは、「スピノザを通して、ライプニッツは、はじめて予定調和の手がかりに達した」と訳される場合もあるが、内容を読めば、むしろ「スピノザによってライプニッツは予定調和の手掛かりだけを得た」と訳すべきものであることが分かる³⁾。

「この可能性を通してライプニッツは彼の仮説の手掛かりに至った。しかし、手掛かりだけだ。更なる展開は彼自身の明敏さの所産だ」(Lessing-W, Bd. VII, S. 307)。なぜなら、スピノザの場合には身体と精神が同一の個体であるため、「調和」と言う必要がなかったからだ、というのがレッシングの指摘である。「言葉遊びしているのと同じでないか！

物が自らとともに持つ調和などというのは！」(Lessing-W, Bd. VII, S. 308)。これに対してメンデルスゾーンも返事を書いているが、彼の方は、『対話』論文での考えを繰り返すに留まっている。メンデルスゾーンの論文は文字通り「対話」篇であったが、それに対する返歌とも言えるレッシングの小論も、二人の対話から生まれたものということになる。

レッシングはメンデルスゾーンの見解を否定する立場に立つが、少なくともレッシングの考えをここにまで引き出す契機になったのはメンデルスゾーンの『対話』であった。メンデルスゾーンの『対話』に登場していたネオフィルがメンデルスゾーンであるのに対して、最初反スピノザ主義者として登場し、ネオフィルに説得されるフィロポンがレッシングであるとする研究者もある⁴⁾。そこまではっきり言えるかどうかはともかくとして、レッシングとメンデルスゾーンの間には、スピノザに関するある種の対話があったことだけは確かである。

2 プラトナー

次は、いわば「小物」の、したがってよく知られていないであろう、プラトナーという哲学者の場合を見よう。

エルンスト・プラトナー(1744-1818)は医学から出発して、後に哲学を論じることにな

3) この点、最近では栗原[2006]が論じている。

4) Beiser[1987], p. 53.

る人で、今では、哲学史的知見を織り交ぜた『哲学アフォリズム集』が知られるのみの「通俗哲学者」という見方が一般的である。しかし、この著作は幾度も版を重ね、増補を重ねており、最初一巻本であったものが、後には大部の二巻本になっているところを見れば、かなり読まれていたのであらうと思われる。

この著作は『アフォリズム集』と言っても、リヒテンベルクやシュレーゲル、あるいはニーチェに見られるようなアフォリズム集ではなく、中身は哲学史と哲学概論を合わせたようなものになっている。例えばフィヒテもこれを講義に利用していたため、批判版のフィヒテ全集にはこの『哲学アフォリズム集』に関するかなりの分量のノートが収められており（Fichte-GA, R. II, Bd. IV）、そのため全集遺稿編の補遺としてプラトナーのこの著作も改めて刊行された（Fichte-GA, R. II, Bd. IV, Supplementa）。ただ、フィヒテ全集に収められたのは1793年に刊行された第六版である。アエタス・カンティアーナに収録されて、流通していたのも同じ第六版である。しかし、われわれにとって興味深いのは、実は1776年に刊行された初版の方である⁵⁾。

問題の箇所は、「世界における完全性と悪との起源について」と題されている部分の中にある。この部分の主要テーゼは「世界にはあり得る最大の可能性がある」というものであるが、つまりライブニッツの『弁神論』に依拠したものである。

その文脈があるからであらうが、そこでプラトナーはついでのようにしてスピノザに触れる。まず興味深いのは、ピエール・ベールのスピノザ解釈を批判していることである。既に見たように、これはメンデルスゾーンと入り口が同じである。更に心身関係について触れ、スピノザにおける両属性間の相互作用がないことを指摘して、「スピノザが調和説を準備していたのはまさにここである」としている。

ベールの批判、スピノザ説と予定調和説の同一性、この二点で、つまりプラトナーのスピノザ理解は明らかに、メンデルスゾーンからの受け売りを哲学概論風に整理したものになっているわけである。プラトナーは正直にその点を明記している。注を付けてわざわざ、メンデルスゾーンの『対話』とヴォルフの『自然神学』を参照するよう指示しているのである。スピノザ説と調和説の同一性に関しては既にレッシングによって批判されていたが、レッシングの論文はこの当時出版されていなかった。プラトナーは当然、それを知ることが出来なかったわけである。

3 ハイデンライヒ

同様に、レッシングのメンデルスゾーン批判を知らなかったものの、プラトナーとは違っ

5) この書を見ることができたのは、大阪大学図書館のご高配のおかげである。記して感謝する。

た見解を抱いていたのがハイデンライヒである。

1789年に出版された『スピノザによる自然と神』という著作である⁶⁾。これも対話篇で、対話するのはパルメニデスとクセノフォンと呼ばれる人物たちである⁷⁾。対話をリードするのはクセノフォンである。クセノフォンがメンデルスゾーンの『対話』を俎上に載せている箇所を取り上げる (Heydenreich, S. 90-93)。

クセノフォンはメンデルスゾーンがスピノザ説と予定調和説の関係を論じていたことを取り上げて、メンデルスゾーンの見解はランゲに依拠していると指摘する (Heydenreich, S. 91)。ランゲとは、ヴォルフに激しい論難を投げかけ、ヴォルフ哲学をスピノザ主義だと主張した神学者のヨアヒム・ランゲのことである⁸⁾。ランゲの『新哲学の吟味』という、代表的なヴォルフ批判書の一つに、『エチカ』第三部定理二を引いている箇所がある。それがメンデルスゾーンの説の典拠になっているというのである。ランゲはスピノザのテキストの様々な箇所を引き合いに出しているから、メンデルスゾーンが定理二に触れたのもたまたまだった可能性もあるが、スピノザからの引用箇所と、それに基づく主張が重なっていることからすれば、ハイデンライヒの主張も理解できる。更には、ヴォルフがランゲに反対していることも指摘されている。これも事実ではあるが、これによってハイデンライヒは、メンデルスゾーンの説の奇妙さ、われわれを困らせた奇妙さを指摘しているわけである⁹⁾。

そしてハイデンライヒ自身はメンデルスゾーンのこの見解には賛成しない。すなわち、スピノザ説はライプニッツの予定調和には至らない、というのである。その理由としてハイデンライヒは、レッシングの小論を知らなかったはずであるが、レッシングと同じ論拠を挙げている。すなわち、スピノザにおいて物質と思考は全く同一だから、というのである (Heydenreich, S. 93)。

4 プラトナー再び

ハイデンライヒは既に汎神論論争とカント以降の世代に属する¹⁰⁾。ハイデンライヒの対話篇の二人の登場人物のうち、パルメニデスはメンデルスゾーン、ヘルダーの読者

6) 文献欄を参照。

7) Gawoll[2002]によれば、クセノフォンはスピノチスト、パルメニデスは有神論者だという (S. 423)。

8) この点については、本稿の前稿、平尾 [2011a]、より詳しくは平尾 [2004] を参照。

9) 前稿、平尾 [2011a] を参照。

10) ハイデンライヒの生涯、またそのスピノザとの関わりについては、Gawoll[2002] に詳しい。

であり、対するクセノフォンはヤコービ、ヴィツェンマン、レーベルク¹¹⁾を勧めている（Heydenreich, S. 86-7）。つまり、パルメニデスは汎神論論争世代を代表しており、クセノフォンはそれ以後の時代を代表していることになる。ハイデンライヒの描く対話は、いわば、汎神論論争を挟んだ二つの世代の間の対話なのである。

こうした時代の展開を極めて鮮やかに示している例を再びプラトナーに即してみておきたい。それは、『哲学的アフォリズム集』の1776年の初版と、1793年の第六版を比べてみると一目瞭然である。

初版では、哲学概論風の叙述の中で補足的にスピノザ主義が登場していたが、第六版では、「スピノザの体系」と題する独立した節が登場する。体裁としては、スピノザが詳しく扱われることになったように見えるが、中身を見ると、必ずしもそうではないことが分かる。プラトナーは極めて率直に、「以前私は、スピノザの体系を性急に理解したがっており、理解したと思い込んでいたのだが」と切り出す。

「他の人たちがその体系の意味に到達したのなら、彼らには頭の下がる思いがする。というのは、私の考えでは、スピノザの『エチカ』は極めて理解しがたい書物だからである。」（Platner [1793], S. 406）

二つの版の間には驚くべき落差がある。初版でいわば自信満々でスピノザについて断定していたプラトナーは、ここではいかにも自信なげである。この変化の要因の第一に挙げられるのは、もちろん、二つの版の間の時期に起こった汎神論論争である。プラトナー自身、ヤコービの『スピノザ書簡』の名前を挙げている。しかしプラトナーは、ヤコービのスピノザ解釈でスピノザが理解できた、ともはや言わない。これは推測ではあるが、かなり確実性の高い推測だと思われるのは、おそらくプラトナーは、汎神論論争でスピノザそのものが問題視される前には、メンデルスゾーンによって、また古くはヴォルフによって提示されていたスピノザ解釈で、スピノザについては問題は解決済みだと考えていたのだろうということである。そうしたプラトナーにとっては、汎神論論争は、それまでの安定していたスピノザ理解を崩してしまうものでしかなかったわけである。そのためプラトナーはきわめて不安定な状態に陥っている。プラトナーは幾つもの疑問を掲げて、「これらやその他の点について私は、何ら確定的なことを言う自信がない」（Platner [1793], S. 407）とまで言っている。

ハイデンライヒは既に汎神論論争以降の世代であるが、それに対してプラトナーがこうした動揺を見せているのは、汎神論論争の以前の状況と以後の状況を両方とも知っている

11) ヴィツェンマン、レーベルクはともに、汎神論論争直後の時代にスピノザを論じた哲学者たちである。彼らについては別に論じたい。

からである。ハイデンライヒら汎神論論争以降の世代、更にはその後の、例えばフィヒテ、シェリング、ヘーゲルらにとって、スピノザ主義の出発点にあるのは、汎神論論争であり、ヤコービのスピノザ解釈である。そのため彼らは、もはやメンデルスゾーンのスピノザ論については言及することすらない。しかし、以上のように見てくれば、ヴォルフに依拠しながらメンデルスゾーンが普及させた論点が、汎神論論争の時期まで広く受け入れられていたこと、少なくとも多くの人びとに読まれ、参照されていたことが分かるのではないかと思う。逆に言えば、ヤコービと汎神論論争の登場によって、そうしたスピノザ主義受容の水脈が断ちきられた、あるいは地下水脈となってしまったと言えるかもしれない。

神—世界関係——メンデルスゾーンからの流れ2

1 レッシング

次に神と世界の問題に移ろう。

やはりこの点ではまずレッシングの名前が上がりはするが、ここではレッシングは外しておく。

レッシングには小論「神の外なる事物の實在について」があり、これを通して『対話』で先に採り出しておいた神と世界の問題とレッシングの議論を繋げることもあるいは可能かと思うが、われわれの課題からすれば、それを阻害する要因が二つあるからである。一つには、ここにはスピノザへの言及が見られない。また、この点はレッシング自身の思想、特に「レッシングのスピノザ主義」とは何かといった問題との関連を考えねばならず、ヤコービが仕掛けた罠に陥る可能性があるからである¹²⁾。

2 プラトナー三たび

それよりも、三たびプラトナーの『アフォリズム集』初版を参照する方がよい。

スピノザについて触れている部分は、先に述べたように、全体としては弁神論の問題を軸にしているが、内容的には有神論と無神論の問題に収斂している。プラトナーの考えでは、「悪の起源についての有神論的体系は三つ」 (§ 1038) ある。すなわち、マニ教、アウ

12) この問題は周知のように、ヤコービと晩年のメンデルスゾーンとの間に繰り広げられた汎神論論争の出発点となった、レッシングが生前スピノザ主義者であったか、という問題に関わる。ここでこの問題を取り上げないのは、前稿、平尾[2011a]で述べたように、汎神論論争はメンデルスゾーン『対話』の意味を見失わせる認識論的障害となり得るからである。なお、この問題については、安酸[1998]、特にその第七章に詳論されている。

グスティヌス、ライプニッツの体系である（§ 1039-1041）。プラトナーがここで有神論と無神論を分けている基準は、目的原因を認めるかどうかであるが、目的原因を認めない無神論も三つに分けられている（§ 961-977）。一つ目は目的原因なしに、盲目的必然性に従って活動する普遍的な原理を置く場合。二つ目は普遍的原理を否定し、個々の部分の結果として世界を説明する場合。三つ目は全世界を唯一実体の変容とする場合。スピノザはこの第三の場合に入れられている。

こうしてスピノザを登場させておいて、この後しばらくスピノザについて論じている（§ 977）が、前述のように、プラトナーはそれを、ベールに対する批判から始めている。ベールは古代の哲学者もスピノザ主義もいっしょにして無神論だと言っているが、明確に区別しなければならないというわけである。しかもスピノザに関して言えば、本当のところはスピノザは神を否定して無神論を唱えているわけではなく、「彼の体系において神すなわち永遠で無限な存在以外に何ものも現実的ではないのである。スピノザは神を否定しているのではなく、世界を否定しているのだ」（ebd.）と言う。

総体的に見てプラトナーの見解は、スピノザを無神論と見ているのか、そうでないのかははっきりしない。全体の流れとしてはスピノザを無神論の一種としてはいるが、ベールを批判する段では、無神論ではないとしている。浮かび上がってくるのは、スピノザは神を否定しているというより、世界を否定している、という判断である。

状況証拠からすれば、これはメンデルスゾーンを念頭においた見解だと理解できる。しかし、メンデルスゾーンの見解は、スピノザでは全てが神の内のあるため、神の外の世界がないというものであったから、強調点が異なっている。少なくともメンデルスゾーンにはこれほど明確な表現はなかった。あり得るとすれば、『対話』のなかでメンデルスゾーンがスピノザとライプニッツを区別するために主張していた点を、更に押し進めたものと見えるだろう。

3 マイモン

次にはマイモンを見よう。

マイモンはリトアニア出身のユダヤ系哲学者で¹³⁾、学問への情熱に駆られて家族を捨て、各地を放浪した果てに、ようやくベルリンに入ることが出来た。マイモンとメンデルスゾーンは、出身地こそ違うものの、ともに、辺境から出てドイツの学問の中心ベルリンへと入り、まずドイツ語を習得するところから始めなければならなかったにもかかわらず、またたくまにドイツ哲学の状況を掴んでしまったという点で近いものがある。それもあったか、

13) マイモンの生涯とスピノザとの関わりについては、平尾 [2011b] を参照されたい。

ベルリンでマイモンを助けたのがメンデルスゾーンであった。

マイモンの『自伝 (Salomon Maimons Lebensgeschichte)』によれば、マイモンとメンデルスゾーンはスピノザを巡って議論したようであるが、その具体的な中身は触れられていない。ただ、メンデルスゾーンからマイモンへの影響は、『哲学の進歩について (Über die Progressen der Philosophie)』という論文ではっきりと確認できる。スピノザとライプニッツの関係を論じるに当たって、メンデルスゾーンから長い引用を行って、それに賛意を示している。「ライプニッツとスピノザの体系の比較に入る。私の知る限りでは、思慮深いメンデルスゾーン以外の誰も、この比較を完全な仕方で行っていない」(Maimon-W, Bd. I, S. 60) というのである。

ここでマイモンが引用しているのは、実はメンデルスゾーンの『対話』ではなく、メンデルスゾーン晩年の『朝の時間』(Mendelssohn-S, Bd. III-2, S. 105-106) であるが、その中身を見てみると、実は内容的にはほとんど重なっていることが分かる。スピノザは神を必然的な存在としており、事物は偶然である、それには賛成できるが、しかし、その偶然的な事物が神の外に実在性を持っていると主張するのがわれわれだ、つまりライプニッツ主義だというのである。

再び『自伝』を見てみると、直接メンデルスゾーンへの名指しはないが、同じ論点が見られる。マイモンの見方では、スピノザの「説においては一こそが実在的であり、しかし多様性は単に観念的である。これに対して無神論の説においてはまさにその反対である」(Maimon-W, Bd. I, S. 154)。そこで、マイモンはこう主張する。

「どうしたら人がスピノザ説を無神論とし得るか不可解である。両者は互いに正反対なのであるから。無神論においては神の存在が、しかしスピノザ説においては世界の存在が否定される。従ってそれは、むしろ無世界論的な説 (das akosmische System) であると言わなければならない」(ebd.)。

これは内容的に言えば、メンデルスゾーンよりもプラトナーに近い見解に見えるが、マイモンがプラトナーを読んでいたのかどうかは定かではない。しかし、マイモンの方は、「無世界論」という命名を行っているばかりか、無神論でなく無世界論だとしている点で、プラトナーよりも更に明確な輪郭を持った主張になっている。

メンデルスゾーンは、スピノザを無神論というレッテルから解放し、逆に、スピノザは神の外なる世界をオミットしているのだと解釈していたが、プラトナーは端的に「スピノザは本来は神ではなく世界を否定している」と理解した。そしてここマイモンに至って、そのスピノザ解釈に「無世界論」という明確な命名が行われたことになる。

結び

1 マイモンからヘーゲルへ

スピノザ主義は無世界論である。そう述べたのはヘーゲルだと思われる。ヘーゲルは『エンチクロペディー』や『哲学史講義』で繰り返しこの説を披露している。しかし、実は「無世界論」という言葉を明確に用いたのはマイモンの方が先で、少なくとも私はそれ以前にはこの言葉が使われている例を知らない¹⁴⁾。ヘーゲルがこの言葉をどこから得たかを明確に示す直接の証拠はない。しかし、ヘーゲルがこの言葉を知ったのは、マイモンのこの説がデ・ムールという人に引用されているのを読んだからだろうと推測されている¹⁵⁾。

しかし、もちろんヘーゲルとマイモンは同じではない。とりわけ、われわれの見て来たところを前提とすれば、ヘーゲルではメンデルスゾーンからマイモンまで保存されて来たものがすっかり消え去っている。メンデルスゾーンもプラトナーもマイモンも、共通してスピノザとライプニッツと無神論をセットとして考えていたが、ヘーゲルでは、ライプニッツが落ちている。そしてプラトナーやマイモンでは参照されていたメンデルスゾーンの影が消えてしまっている。ヘーゲルは完結した体系的哲学を生み出したが、逆にそのために歴史としての歴史を抹消しているのだと言えるかもしれない。

私は、メンデルスゾーンのこの作品が、底が浅そうに見えて、実はよく分からないというところから出発した。そのためにその周辺に答えを、幾つかの文脈として求めなければならなかった。しかし同時に、逆にこの作品によってこそ説明できる文脈がある、と言えるのではないかと思う。

2 メンデルスゾーン『対話』の思想的意義

メンデルスゾーンの『哲学的対話』は小さい書物でもあり、そのスピノザ理解もとりたてて高度なものであったわけではない。しかし、この書をドイツにおけるスピノザ主義受容史から落としてしまったとすれば、多くのことが説明できなくなるのではないか、と思う。ただし、重要なのは、メンデルスゾーンの論点が独自のものであったから、というだけでなく、あるいはそれ以上に、スピノザとライプニッツという問題系が、ヴォルフか

14) マイモン以降、ヘーゲル以前にはフィヒテの例がある。ただしフィヒテは、それをスピノザ主義に対して用いているのではない。なお、この点を含め、無世界論問題については、平尾[2009]および[2010a]第四章で簡単に整理しておいた。

15) Herausgebers Anmerkung, in: Hegel-V, Bd. IX (1986), S. 323. また, Melamed[2004], p. 94-95を参照。

らドイツ観念論の時代にまで連綿と受け継がれたその重要な中継点が『対話』であったからでもある。スピノザ・ルネッサンスはドイツにおけるスピノザ受容の重要な転機ではあるが、それを引き起こした汎神論論争やヤコービ、後期のメンデルスゾーンのみに注目しては、こうした重要な水脈が隠蔽されてしまうのではないかというのが私の理解である。実際、メンデルスゾーンから出発することによって、彼の『対話』を受容したプラトナーやハイデンライヒの場合が鮮やかに示していたこと、すなわち、汎神論論争やヤコービの『スピノザ書簡』が持った歴史的意味、それがドイツのスピノザ受容にもたらした変化も明らかになった。

確かにわれわれは、あまり注目されない『対話』から出発したばかりか、更によく知られていない「小物の」哲学者、思想家たちを取り上げた。しかし、マイモンは「『自然は飛躍しない』というのは確かな真理である。大きな出来事は多くの小さな出来事の帰結である」(Maimon-W, Bd. I, S. 300)と述べていた。このことは思想的な探索において極めて重要であると思われるのである。

〈欧語文献〉

- ◎Fichte, *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Hg., Lauth, Reihard und Jacob, Hans, Frommann, 1964-. [Fichte-GA]
- ◎Gawoll, Hans-Jürgen, “Karl Heinrich Heydenreich: Spinozismus als Metaphysik und Vernunftglaube”, in: Schürmann, Eva, Waszek, Norbert und Weinreich, Frank (Hg.), *Spinoza im Deutschland des 18ten Jahrhunderts*, Frommann-Holzboog (Spekulation und Erfahrung, Abt. II, Bd. 44), 2002.
- ◎Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*, Hg. von Garniron, Piere und Jaeschke, Walter, Felix Meiner (Vorlesungen. ausgewählte Nachschriften und Manuskripte, Bd. IX), 1986-1996. [Hegel-V, Bd. IX]
- ◎Heydenreich, Karl Heinrich, *Natur und Gott nach Spinoza*, 1797, ND, Culture et Civilisation, 1973 (Aetas Kantiana ; 98).
- ◎Leibniz, Gottfried Wilhelm, *Die philosophischen Schriften*, Hg. von Gerhardt, C. J., 1875-90. [Leibniz-S]
- ◎Lessing, Gotthold Ephraim, *Gesammelte Werke*, Hg. von Rilla, Paul, Aufbau, 1968. [Lessing-W]
- ◎Maimon, Salomon, *Gesammelte Werke*, Hg. von Verra, Valerio, Olms, 1965.[Maimon-W]

- ◎Melamed, Yitzhak Y., “Salomon Maimon and the Rise of Spinozism in German Idealism”, in: *Journal of the History of Philosophy*, 42-1, 2004.
- ◎Mendelssohn, Moses, *Gesammelte Schriften Jubiläumsausgabe*, Friedrich Frommann, 1971-1974 . [Mendelssohn-S]
- ◎Platner, Ernst, *Philosophische Aphorismen*, 1776.
- ◎Platner, Ernst, *Philosophische Aphorismen*, 6te., 2 Bde., Culture et civilisation, ND. der 1793-1800 Ausgabe, 1970 (Aetas Kantiana, Bd. 203) .
- ◎Spinoza Opera, im Auftrag heidelberger Akademie der Wissenschaften, Hg. von Gebhardt, Carl, 1925. [Spinoza-O]
- ◎Christian Wolff, *Gesammelte Werke*, Hg. von Ecole, Jean, Arndt, Hans Werner, Corr, Charles A., Hofmann, Joseph E., Lenders, Winfried, Thomann, Marcel, Olms, 1978-. [Wolff-W]

〈邦語文献〉

- ◎平尾昌宏「啓蒙期ドイツのスピノザ主義——ヴォルフ・ランゲ論争から」『スピノザーナ』5号, 2004年a.
- ◎平尾昌宏「形式・体系・自然——シェリング『叙述』とスピノザ『エチカ』」松山壽一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』, 晃洋書房, 2004年b.
- ◎平尾昌宏「ドイツにおけるスピノザ主義の基本構図——後期啓蒙から汎神論論争まで」『大阪産業大学論集（人文科学編）』121号, 2007年a.
- ◎平尾昌宏「スピノザを巡るシェリングとヤコービの対話——『自由論』序論部の読解」『スピノザーナ』8号, 2007年b.
- ◎平尾昌宏「シェリングと無世界論——『自由論』序論部におけるスピノザ観への一評注」『大阪産業大学論集（人文・社会科学編）』5号, 2009年.
- ◎平尾昌宏『哲学するための哲学入門——シェリング『自由論』を読む』萌書房, 2010年a.
- ◎平尾昌宏「汎神論論争とドイツ観念論の間——ハーマンのヤコービ宛書簡に見るスピノザ主義」『大阪産業大学論集（人文・社会科学編）』10号, 2010年b.
- ◎平尾昌宏「メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈」『スピノザーナ』18号, 2011年a.
- ◎平尾昌宏「ドイツのスピノザ主義受容とザロモン・マイモン——メンデルスゾーンとの対比において——」『京都ユダヤ思想』近刊, 2011年b.
- ◎栗原隆『ドイツ観念論の歴史意識とヘーゲル』知泉書館, 2006年.
- ◎レッシング, ゴットホルト・エーフライム（三好健司訳, 解説）「神の外における事

物の実在性について／スピノザを通して、ライプニッツは、はじめて予定調和の手がかりに達した／啓示宗教の成立について」『大阪電気通信大学研究論集』（人文・社会科学編）18号，1982年．

◎安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙——レッシング宗教哲学の研究』創文社，1998年．